

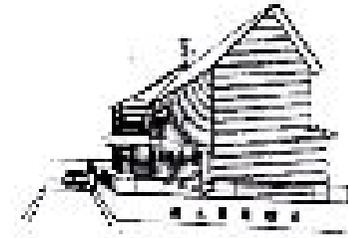
<今朝の聖書から>

文章：村上

“よくっておく。預言者は、自分の郷里では歓迎されないものである(ルカ4:24)”という言葉が聖書にあります。私たちの神は“まことの生ける主なる神”であるということは知っていても、真実そうであるということを知ることの難しさ・困難さを語っているように思います。続くルカ24:26には“エリヤはそのうちのだれにもつかわされなくて、ただシドンのサレプタにいるひとりのやもめにだけつかわされた”ともあります。歴史の出来事を用いてイエス様が語っておられるのです。“主は救い主”であることは知っている、しかし本当にそうだと思っているのと、“ということになっている”と思っているのでは、大きな違いがあります。たしなみ程度に、神様を知っていたのでは、神様もその程度にしかなくて下さらないでしょう。このことについては、イースターの出来事についても学びました。先の新約聖書ルカ24:26の出来事が、今朝のみ言葉です。“ザレパテ”が、列王記17:9の“サレプタ”のことです。列王記に描かれている時代は、王をはじめ皆が異教崇拜に陥りバアル神アシュラ神などと呼ばれている神々に走り、これらに願い事をするに傾き、モーセに現れた、イスラエルの神々から離れた時代でした。“私の願い事のための神”があちらこちらで作られ、沢山の供え物がなされていきました。列王記では、ここで記録されているかんばつの被害を主の審判として描いています。このような状況の下、エリヤは遣わされます(17:8)。“ひとりのやもめ女が、その所でたきぎを拾っていた”と10節にあります。これは貧しさの象徴です。この女性は寡婦であったため、さらに貧しい状況にありました。そして“一応は知っている挨拶”として、12節にあるように“あなたの神、主は生きておられます”と言います。エリヤがイスラエル人であることは服装や言葉などから分かったのでしょうか。その言葉が真実になるのです。“乏しさ”と“命”について訴えます。“あなたの神、主は生きておられます。わたしにはパンはありません。ただ、かめに一握りの粉と、びんに少しの油があるだけです。今わたしはたきぎ二、三本を拾い、うちへ帰って、わたしと子供のためにそれを調理し、それを食べて死のうとしているのです(12節)”というのがその訴えです。ここでエリヤは、遣わされた者として働きを行うのです。この異郷の人を通して神様は皆が知っていること“命も豊かさも、それは主が与える”ことを知らせます。

週報

2009年 4月 26日



伝えよう 救い主を
迎えよう 主の民を

日本フリーメソジスト

清水草薙キリスト教会

牧師 村上 定幸

| | | |
|---------|---|----------|
| ユース礼拝 | 毎日曜日 | 午前 9:00 |
| 礼拝式 | 毎日曜日 | 午前 10:30 |
| | (聖餐式 第一日曜日) | |
| 夕礼拝式 | 毎日曜日 | 午後 7:00 |
| エステル一会 | 毎水曜日 | 午前 10:30 |
| 聖書研究祈祷会 | 毎水曜日 | 午後 7:00 |
| ホームページ | http://kusanagi.church.jp/ | |

〒424-0885

静岡市清水区草薙杉道3丁目2-26

☎054-345-4070 E-Mail grace@big.jp